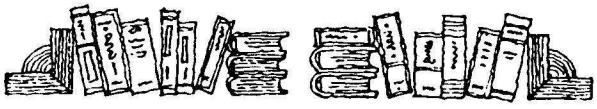
日本女子大学

国語国文学会だより



No. 46　　2012. 4

日本文学科卒業生の会

国語国文学会　平成二十三年度秋季大会　報告

平成二十三年度秋季大会を十二月三日（土）に開催しました。

◆午前の部　於　新泉山館小会議室三・四

『日本女性文学研究叢書』（古典編）刊行準備報告会

〈司会〉　本学教授　福田安典氏

〈報告者〉

上代文学　本学学術研究員　岩田芳子氏

中古文学　本学博士課程後期二年　曾和由記子氏

中世文学　本学非常勤講師　壬生里巳氏

近世文学　本学非常勤講師　田代一葉氏

◆午後の部　於　百年館低層棟二〇七教室

公開講演会

・『浄瑠璃御前物語』の原風景

本学教授　福田安典氏

・生きていた宮廷女房達――平安朝から昭和初期まで

鶴見大学名誉教授・文学博士　岩佐美代子氏

◆懇親会　於　七十年館生協食堂

〈岩佐美代子氏講演より〉

生きていた宮廷女房達――平安朝から昭和初期まで

私は、京極派和歌を中心に勉強して参りましたので、その関係の歌人たちの登場する、その時代の女流日記を勉強して参りました。『とはずがたり』は皆さまもよくご存知でいらっしゃいますけれども、その他の作品は必ずしも十分ご承知ではないでしょうと思います。しかしこういう研究上未開拓の作品だけではなく、実は古来研究されつくされているはずの『枕草子』や『源氏物語』、また中古の女流日記につきましても、実は解釈上いろんな問題が残っているということに気がつきました。

私はたまたま皇室に奉仕するご縁の多いような家に生まれまして、同じような家に嫁ぎました。また私自身、昭和天皇の第一皇女、照宮成子内親王と同い年でございまして、満四歳の時から御遊び相手として奉仕に上がりまして、学齢に達しましてからは女子学習院の同級生として十三年間過ごしました。そもそも、宮廷内のことは何事にも依らず濫りに外部で口にしないというのが私の育った社会での不文律でございました。けれども、現代の社会、また国文学界の状況からいたしまして、今私がお話ししなかったら、宮廷女房の生態や心持ちというものは、将来全く分からなくなる。彼女たちの文学への理解も大きく損なわれたままで、後代へ続いていくのではないか。そのように懸念されますので、あえてこういうお話を申し上げる次第でございます。

その一例を、『枕草子』から挙げてみます。

唐絵にかきたる懸盤して、ものくはせたるを、見入るゝ人もなければ、家のあるじ、「いとひなびたり。かゝる所に来ぬる人は、ようせずは、あるじ逃げぬばかりなど、せめいだしてこそまいるべけれ。むげにかくては、その人ならず」などいひて、取はやし、「この下蕨は手づからつみつる」などいへば、「いかでか、さ、女官などのやうに着きなみてはあらん」など笑へば、「さらば取おろして。例のはひぶしにならはせ給へる御まへたちなれば」とて（以下略）（「九五、五月のご精進のほど」）

例の、ほととぎすを聞きに賀茂の奥に遊びに行って御馳走になる、という場面でございますね。立派なお膳に、御馳走を盛って勧められるんですが、誰も

手をつけない、という場面です。この〝はひぶし〟につきましては、昔からはっきりした解釈がございません。通常言われておりますのが、「這伏也、身を自由にありならふ心也」という、これは『春曙抄』ですね。そしてそれを受けて、「さて這臥とは、春註（春曙抄）に、身を自由にありならふ心也といへる如く、当事の女房たちは、衣服の幅広く裳袴の長きに、身の運動心に任せず、何事も人を使ひてせさせ、身を自由にして、己れと働かぬより、這臥といふ渾號をいへる也」（関根正直『集註』）。これが定説のようになりまして、腹這いのような姿勢であろうとか、そういうような解釈がされておりました。

これには別の解釈もあります。「はひぶしは、這伏の義にて、宮仕えする女房の居ずまひの名と見ゆ。その様、体を前方に俯し、肘を座におろして、居丈ひろく、衣裳に埋れたる如くに座するをいふ。『例の』とあるも、女房は常に御主人の御前に侍へば、敬屈の態度に慣れたるを思へる也。諸註『這ひたり臥したり、身を自由にありならふ』といへるは、余りなる臆説なり。」（金子元臣『評釈』）。金子さんと同じような解釈は、ほかにもあるわけでございますけれども、こういうスタイルというのはどうも想像しにくいので、通説の方が普通に通っていたわけです。ところが、義母も出仕の始めには、当時の女官の制服であった袿袴（けいこ）、すなわち、小袖、切袴に袿をひとつ羽織った姿で日常奉仕し、その袿をおかいどりといっておはしょりにした、そういう格好で、御殿の拭き掃除でも何でもして働いたと申しておりました。それほどでなくても、宮廷奉仕の女房が着物が重いからといって、普段腹這いになってばっかりいるって、そんなことありえませんでしょう。それでは女房を雇っておく甲斐がなにもないわけでして、『枕草子』におきましても、いたるところで唐衣姿の女の女房が活発に活躍しております。

実は幼いとき、私の家は古い家ですから、何だか分からないおばあさんっていうのが、五人も六人もいたのです。別にお女中さんとして働くわけでもないし、親戚のおばあさんみたいのもいれば、昔のお女中さんだったのかもしれない人とか、それは別に家事なんかに働きもしませんで、時々母の所へやってきて、ぐじぐじと昔話やら愚痴をこぼしたりしているのです。その時に、お茶菓子なんか出しますと、彼女たちはそれを決して机の上で母と一緒に食べない、畳の上におろしまして――膝の前の畳にお茶菓子を置き、両肘を膝に着けて、手の先だけ動かして食べている。そういうスタイル。それを見慣れておりました。何かの拍子に母が「あれが〝はひぶし〟よ」と教えてくれたことがありました。義母も、大宮様の御前でお菓子などをいただくときはやはり同じような格好をしていただいたと申しております。それで、そのことを論文として発表いたしましたところ、すごい反響があったのです。いろんな方から、必ずしも皇室と関係なくても、地方の古いお家の出の方などから、「うちで年寄りがやっぱりそういう格好をしていた」「腰が曲がっているからああいう格好をして食べるのだろうと思っていた」というようなお話もいくつもうかがいました。

その後になりまして榊原喜佐子さんの『徳川慶喜家の子ども部屋』というご本の中に、「お次の人がお上といっしょの卓につくことは決してなかった。有栖川宮家のお仕え人が母のお居間にあがっておやつをご相伴するところを見たことがあるが、母は卓の上のお膳で召し上がり、彼女らは膝の前の畳にお盆お置き、両肘を膝に付け、前かがみにいただいていた。お次の人のご相伴は、こういう作法でいただくものだと聞いた。」とあります。同じスタイルですね。それからまた、お茶をなさる方からは、「お茶の時のお道具拝見の格好ですね」とおっしゃられたことがございます。これでもって、おそらく「はひぶし」というのは、解釈が決定すると思います。

隆家が扇の骨を持ってきて、大変珍しい扇の骨だと、他にないと言って自慢する。それで清少納言が、「さては扇のにはあらで、くらげのなり」という。それで大笑いになったという話。それを自慢話になるから書くまいと思ったんだけれど、そういう面白い話を一つでも落としたら駄目よと言われたので書いた、という風に言っております。こういう後宮でのエピソードをみんな知っていて、みんなが清少納言を応援して書かせていた、ということがわかると思います。私も実は宮様のことを申し上げるというのは非常に抵抗がありまして、こういうことを言ってはいけないのではないかとずっと思い続け、みんな同じ思いをしているのに私一人だけ得々としてこういうことを言うというのは申し訳ないと思い続けておりましたけれども、友達がそうではないと言ってくれました。「私たちは言いたくても言う場がない、あなたは場があるのだから言ってくれ」、そう言って

くれたものですから私は本当に救われましたけれども。おそらく清少納言の同僚たちもそういう思いで、そういう友情関係で、清少納言を応援したのでしょう。私も大変ありがたく思っておりますし、清少納言も得意になっているのではなくて、同じ気持ちで『枕草子』を書いたのだろうと思います。

以後中世に至る旧宮廷女房日記、すべてを見渡しまして、主君後宮というのは色々様々でございます。一つとして前段の作品を真似した物はございません。後宮というものは同じようではあるけれども、時代の空気を反映しながら主君の個性、女房たちの反応、それぞれの性格を持って作り出される、そういうものなんですね。初めに宮廷の前のことは語らないと申しましたけれど、でもこんなに日記があるじゃない、ということにはなりますけれども、それは止むに止まれぬ語りで、自分が奉仕した美しい後宮が失われてしまって語らずにはいられないという衝動故でございます。『紫式部日記』だけはちょっと違うところがありますが、それも彰子という優れた主君を一方に置きながら、にも関わらず後宮に埋没して行けない自分、というものを深く見つめていく、大変個性的な作品として理解できるだろうと思います。

後宮というものは主君と女房の合作でございます。その伝統はかすかにではございますけれども遠く昭和十年代、宮様と同級生六十人の間にまで続いておりました。それは、多くは『紫式部日記』のような遠慮がちなものではございましたけれども、やはり『枕草子』のように楽しい部分も多々ある。それは大げさなことではなくちょっとしたことで今もそれぞれの心の中に残っている、それを何かのはずみでちょっと誰かが言う、「ああそうだった」と皆が思う、そういうものでございます。今は失われてしまいましたそのような世界を、少しでも理解していただきたいと思いますので、大変プライベートなことまで申し上げまして恐縮でしたけれども、そんな話を申し上げたわけでございます。

（文責　日本女子大学国語国文学会）

※『研究ノート』第四十号（二〇一二～二、日本女子大学国語国文学会）の講演記録より一部を抜粋、編集して掲載いたしました。

（講演要旨）『浄瑠璃御前物語』の原風景

本学教授　福田安典

時代の移り変わりというか、黎明期の文芸については不明な点が多い。近世文芸に限定して言えば、たとえば『浄瑠璃御前物語』は問題のある作品である。手近なものを繙けば、「それまでの能操にかわって浄瑠璃操を生み出す契機になったと推測される」（平成十年『日本文芸史』河出書房新社）とある。すなわち今や近世演劇から日本古典演劇の代表となった「人形浄瑠璃」の起源と目されるこの作品がいまだ「推測」でしか語りようがないのである。『浄瑠璃御前物語』が舞台にかけられたという確証はなく、それでいて人形操りのことを「浄瑠璃」と呼んでいるという奇妙な現状がある。

一方で、近世小説の立場に立てば、こちらもその第一作を決めなければならない。一応は『恨之介』をもって近世小説の嚆矢とは見なせるものの、その『恨之介』にも『浄瑠璃御前物語』の影響が見られる。『浄瑠璃御前物語』は近世小説の第一作と考えることもできるのである。

つまり、『浄瑠璃御前物語』は、人形操りと近世小説の二つの大きな起源と考えられるのである。

検討の前に、従来の『浄瑠璃御前物語』の研究を略述する。まず『浄瑠璃御前物語』には十六段本系と十二段本系の二つの系統本文があることが明らかにされている。

十二段本系は、「申子」から始まり、御曹司（牛若）と浄瑠璃御前の恋を中心に「吹上」での別れまでを描く。嵯峨本（古活字本、東大本）、前島本古活字版、正保三年整版十一行本などがある。この系を基本とする立場に立てば十六段本系は増補となる。また、この系統が「語り」の正本なのか、「読み物」の草子（近世初期小説）なのかを決める必要がある。鍵を握る本は、従来「正本」に近いとされた前島本と、操りとは無関係な（それでも「語り」とは関係あるかもとされる）東大本である。

十六段本は　十二段本の後に「御曹司の秀衡入」「浄瑠璃御前の最後」「笹谷下段（母の死）」「御曹司都入」の四段がある。熱海本絵巻、山崎美成旧蔵写本、阪口本など。この十六段本が原像だという有力な説がある。一方、漠然と語り物とは言われるが、この系統が正本系と認められるのかどうか、草子系として取り扱うべきかは未整理である。鍵を握るのは山崎美成旧蔵写本である。

十二段本系については、『よだれかけ』（慶安元年刊）、『京童』（明暦四年）などの近世初期の資料に、操りの起源と記され、藤本箕山の『色道大鏡』には

小野お通作として書かれている。そのためにこの系統、特に東大本を持って操りと結びつけようとした試みもあったが、信多純一先生が草子系として位置づけられている。（「浄瑠璃」古活字版系写本二種昭和五十五年『大阪大学文学部紀要』第二十巻）。一方、十六段本は、山崎美成によって近世後期に発見され（『麓の花』文政二序）、以後操りの正本として、また浄瑠璃の原型として注目されている。つまり、熱海本十六段本系を正本系、東大本十二段本系を草子系として扱う、というのが現状であるが、まだ十分な議論がなされているとは言えない。漠然と東大本が草子系の祖と説かれているにすぎない。

その中にあって、注目すべき新出本（日本女子大学蔵本、以下「女子大本」）が出現した。近世初期写の大本一冊で、黒田亮旧蔵である。東大本と同系本文だが異同の多い点が注目される。その異同は、分量的には東大本が多いので、東大本にはあって女子大本には無い詞章があるというものであれば、単に女子大本が東大本の抄出ということになる。しかしながら、逆に東大本には無くて女子大本にある、しかも同系統の北大本や関口本にも見えず、女子大本にしか無いという詞章が何カ所も見られるのである。また、そのいくつかの箇所については女子大本の本文がもっとも意味が通じるという現象が見られる。

この女子大本の出現によって、近世初頭に草子として読まれていた『浄瑠璃御前物語』の原風景を点描することができるようになった。すなわち、従来は草子系の祖型として何となく東大本を位置づけてきたが、それは誤りであって、東大本を遡る親本を想定せざるを得なくなったのである。すなわち東大本も女子大本もその親本から分かれた子本の一つ一つであるということになる。そこに北大本や関口本を並べてみれば、その親本を管理し、多くの子本を作成した者の存在が浮かび上がってくる。その管理者は近世初期の草紙屋と見てほぼ間違いないであろう。近世小説の出版前に、草紙屋によって複数の写本『浄瑠璃御前物語』が作成、流通していた風景を描くことができるのである。

今後、同様の新出本の出現が待たれる。

報告　文学散歩（10月27日・12月21日）

一、子規庵へ　根岸二丁目、鶯谷駅から西へ徒歩五分程。書道博物館の向い側。建物は元加賀藩前田家の下屋敷で、二軒長屋の一つ。20坪程の庭があり、周辺には石神井川用水の流れが音無川として流れていた。上野の北麓に位置し、鶯の鳴く名所と言われ、「五月雨やけふも上野を見てくらす」「鶯や東よりくる庵の春」等の句がある。現在の子規庵は昭和26年高弟の寒川鼠骨等によってほぼ復元、再建されたもの。子規は明治27年母と妹と移り、同35年34歳11ヶ月の生涯を終るまで住む。入居当時は病状も軽く、数多くの文人との交流があり、句会や歌会を開いては、俳諧の革新を唱えて行った。明治30年頃からは次第に容態が悪化。書くことへの欲求はすさまじいものがあり、仰臥のまま「墨汁一滴」「仰臥漫録」「病牀六尺」等数々の記事を書き継いで行く。病牀があった六帖間には、愛用の座机（複製）と珍しく真正面を向いた写真が置かれていたが、子規も気に入ったという。庭に目をやると明るい陽差しに糸瓜の群れが緑に輝いて揺れていた。死の直前に書いた糸瓜の三句が頭をよぎり、しばし立ち去り難いものがあった。

二、書道博物館へ　洋画家で書家でもあった中村不折が昭和11年、40年余にわたって蒐集した中国及び日本書道史研究上、重要なコレクションを有する専門博物館として旧居跡に創設、開館。当日は企画展として「呉昌碩」の作品を開催中。後日NHKの「坂の上の雲」の放映に伴い、子規の書簡や短冊等が展示され再び訪れる。不折は子規に絵の手ほどきをする等親交があったが、画室新築に際し、子規も祝賀会に出席。「不折君の画室に会す」と題して送った「祝宴に湯婆（ゆたんぽ）かかへてまいりけり」「辛苦ここに成功を見るふゆの梅」の短冊を見ることが出来た。立体感があり、筆圧の変化の豊かな書風。他に子規没後虚子、碧梧桐等が中心となって出版した画帖があり、子規が晩年に描いた自室の風景や自宅から見える山、庭など八枚の絵も展示され、子規を身近に感じながらの一ときであった。

会計係より　▼会費年額一〇〇〇円納入よろしくお願い致します。振込手数料、窓口百二十円・ATM八十円です。▼住所変更の方は転居先をお知らせ下さい。▼（連絡先）〒一八四-〇〇一五　小金井市貫井北町一-二十一-十　立川和子

二〇一二年四月三十日発行
日本女子大学日本文学科国語国文学会卒業生の会
〒一一二-八六八一東京都文京区目白台二-八-一
日本女子大学　日本文学科内